

平成二十六年一月二十日

慶長五年（一六〇〇）關ヶ原の戦に敗れし豊臣氏は石田三成、小西行長等の名臣を失ひ、毛利輝元また大坂城を去り威望大いに低落す。かかる状況下、秀頼故豊太閤の造營せむとして成らざりし方廣寺大佛の再建を目指す。然るに慶長七年大佛殿は失火により炎上、中斷に迫込まる。同十三年秀頼再び大佛及び大佛殿の造營に着手、同十七年兩者の完成を見、翌翌同十九年開眼法要を迎へむとする矢先、謂はゆる方廣寺鐘銘事件持上がり、解決を見ぬままに、その年の十月大坂冬の陣となり、豊臣氏の滅亡へと暗轉す。

この鐘銘事件、克く知らる、如く梵鐘に鑄出せる銘文中の「國家安康、君臣豐樂」の八文字にして、一は家康の名に安の字を挿むは、家康公を斬らむとする存念、二は豊臣を君として樂しむとは、徳川を排して豊臣の世に反さむの存念明らかなりとの指摘なり。素より根據無き言ひ掛かりなるに、その對應を誤りつるが悲劇を招くことなれり。

豊臣側は大坂に残れる最後の名將片桐且元を家康の居城駿府に派遣して事態の收拾を計らんとす。家康は且元を引見せず、金地院崇傳と本多正純をして、豊臣側の態度を責めしむ。且元武勇は賤が嶽七本槍にその名も高きも、必死の辨明は奸智に長くる二人に體よく遇はれ、成す術もあらざる間に、大坂方は更に淀君の寵厚き大藏卿局を駿府に遣はせり。されどこの二元外交更に徳川方の乗ずる所となり、且元卻つて讒に遇ひ遂に大坂城を後にせざるを得ず、茲にさしも綺羅星の如く居竝びし勇將、賢臣盡く去りて、「桐一葉」落ちたる豊臣、秀吉天下人となりてより僅か三十二年にて滅びにけり。

始めに戻り、且元は如何なる論も崇傳等を説得せむとしたりや、その詳細を知らざるも、後に淀君の江戸詰めなどを自ら提案したることなどより推して、八文字に他意のなき旨を力説せるにあらざや。但しこれにては元來騒動を意圖せる相手には假令且元の誠意を以てするも、事態を解決に導くを得ざるべし。抑も發端は八文字の故意の誤讀にあり、特に「君臣豐樂」の訓はかの林羅山の曲學阿世と評せらる、ものなれば、その漢文訓みを攻撃し、羅山を窮地に迫込ましかば、別の展開もあらましく後智慧を覺ゆ。

嘗て我が國滿洲事變後、諸外國より誤解、非難を浴ぶるも、武力を恃みて免角これを無視し、遂に國を敗るに至る。近時我が國の舉措再び諸外國の誤解を受くるあり。その例を見るに事實に基かざるの曲解多し。斯る「惡意」の誤解は處理を過たば國運を害ふに至るは歴史の示す所、深く肝に銘ずべきに、我がメディアの評者外國の誤解とならば無批判に紹介し、これを招きける原因を政府に求めて攻撃するのみ多く、誤解の當らざるを論證せむとするの動き甚だ少きを憂ふ。

方廣寺の大佛はその後寛文二年（一六六二）の地震にて銅製の佛像破損し、木製に作り直さる、も寛文十年雷火により大佛殿ともども消失す。天保年間に假の再建成るも、凶事息まず遂に昭和四十八年の火災にて全て灰燼に歸す。嗚呼。